

帰りの電車<JR外城田駅>

| | 伊勢方面 | 松阪方面 |
|-----|-------|-------|
| 12時 | 59 | 50 |
| 13時 | 59 | 34 |
| 14時 | 47 | 21 57 |
| 15時 | 12 49 | — |

平成6年 お伊勢さん125社めぐり (12回シリーズ)
 2月 外城田めぐり [約13キロ]

- 【コース】
 外城田駅 棒原神社 坂手国生神社 蚊野神社
 田之家神社 御船神社 (スタンプ) 外城田駅 松阪・伊勢市駅

☆次回のご案内
 3月13日(日)
 小俣めぐり 約8キロ
 集合: 伊勢市駅 (JR側)
 9時40分~10時10分

ラッキーカード
 抽選番号
 40
 2/20 御船神社

外城田めぐり

玉城町の東は宮川左岸以西で伊勢市と小俣町に接し、南は国東山脈が度会町を隔ていくつもの山脚が北に伸びて山脈の間から外城田川に水を注いでいる。西は多気町、北は大仏山の山なみが東西に走って明和町に接し、明野ヶ原を隔てて伊勢湾に達する。

中央には外城田川が西から東へ流れ、外城田の丘と田辺の丘の間には外城田平野をつくり、城池から北流した外城田川古流は、有尔の丘から大仏山南麓に有田平野を生んだ。田丸の町を南北に流れる善兵衛川も外城田川の古流で妙法寺から久保・湯田に流れていた。

善兵衛川以東の田丸は洪積台地となって湯田郷湯田野に続いている。城池から北流する外城田川以東の地は古くは湯田郷に属した狭田の国であったが、玉丸山に城が築かれて以来、伊勢に向かう街道に町家が並び、佐田村から独立して城下町となり江戸時代には宿場町となった。

田丸の旅館で全国的に有名な旅館は、扇屋と森庄で、これらは松阪の小西屋、櫛田の紅葉屋、多気の三木屋、大石の松屋、相可の車屋、大内山の角屋、野後の西村屋などとならんで、参宮街道の大旅館であった。

玉城町一体は神国の中心から大化改新後神郡の中心になり、内宮祢宜の祖荒木田氏が開拓したところと伝えられており、伊勢神宮と深い関係のあったところで祢宜の里や祭主の里があり神田があった。

町の中心田丸は、はせ街道と熊野街道が合流し伊勢に通じる、古来、陸上交通の要衝であった。城下町として、市街戦にそなえた曲折した街道と乱杭状のまちなみが当時の名残をとどめている。

玉城弘法温泉の湧出

温泉の源をなす国東山（くづかさん 標高413.8m）は、その昔、涌福智山（ゆぶくちさん）国東寺の名刹遺跡である。国東寺は昭和20年代に廃寺となったが、

神代より 国をつかぬる 寺なれば
福智をわかす仏なりけり

と、御詠歌にも詠われたほどよく知られた寺であった。

明治22年の国東寺注進による「国東寺調書草案」によると、用明天皇（聖徳太子の父）の時代に大地震が起こり、聖徳太子はそれをしずめるため、天照皇大神宮に参詣し、神のお告げにしたがって国東山に伽藍を築いたという。「湯福智山」は、「湯吹山」に通ずる語呂縁起。

往時、国東寺には弘法大師が弁財天を奉じ祈願したという記録がある。また、登山道山麓の飛石（といし）に、弘法大師にちなむ巨石「弘法石」があり、昔日の土砂流出災害によりこの巨石が百瀬川に転落、永年埋没していたが、災害復旧工事の途中でたまたま発見され日の目をみた。原区ではこれを川から引き揚げ、飛石に安置復元供養した。

この弘法石の発掘再来と、このたびの温泉湧出が時を同じくしたもので「弘法石」の縁起をかつぎ、「玉城弘法温泉」と名付ける。

（ナトリウム－塩化物－強塩冷鉱泉）

・浴用適応症

きりきず、やけど、慢性皮膚病、神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩
うちみ、慢性消化器病、痔症、疲労回復、冷え性、運動麻痺ほか

（歴史読本、玉城町資料）

倭姫命と玉城町

倭姫命世記によると、命の一行は大和から各地を巡歴の後南伊勢へ入られた。飯野高宮から櫛田川を下って佐々牟江宮（明和町大淀の竹佐々夫江神社のあたりという。）に入られた。このとき伊勢の海は静かに淀んでいたのが大淀（大与度）と名付けられた。

外城田川をさかのぼって忌盾小野（ユタテノオノ）がつづまってユタノとなりその中心が湯田である。

さらに外城田川の古流を佐田の地までさかのぼると速河比古が出迎えていた。国を問う命に「畔広の狭田の国と申します。」と答えて佐々上の神

田を献上した。命はここに狭田社を定められた。

さらに川をさかのぼると高水神が出迎え、「この国の名は坂手の国と申します。」とって田上御田を献上し、命はここに坂手社をまつられた。

坂手の国からさらにさかのぼると川幅がせまくなって船が通らなくなった。このとき川の水が冷たく寒かったのでこの川を寒川と名付けられ、御船を留められ、御船社を定められた。御船社のある多気町「土羽」は、「止場」で寒川の船行が止まった土地という意味である。

玉城町の地主神

櫛田川と宮川の間には外城田川がつくりあげた寒川の里にまつる神々は大水神と天須婆留女命（アメノスバルメノミコト）と大歳神の三系統の神々と、鏡を神体に水神をまつる神社が2社ある。いずれも神格は水神で農神である。大水神の子とされる兄弟姉妹の間柄の神々がもっとも多く、狭田国生神社の祭神速川比古命・速川比女命は、棒原神社の祭神天須婆留女命の子とされている。天須婆留女命は、天孫降臨の際供奉した三十二神のうちの一神とされている。出雲系の神は大歳神とその子千依比女命がまつられている。

荒木田氏と玉城

明治以前の神宮には、皇大神宮が荒木田氏、豊受大神宮が度会氏によって世襲で奉仕されてきた。荒木田神主は玉城町近在を本拠地とし、平安後期以後に宇治に移住している。

荒木田氏の姓は、新開地を意味する荒墾田に由来するといわれる。荒木田氏は天武天皇の頃、石敷のときより一門佐禰彦、二門田長に分かれ、ともに現在の玉城町付近に移住開拓したといわれる。そのため、玉城町近在には、荒木田氏一門が湯田郷に、二門が田辺郷にそれぞれ氏神社、氏寺を建てている。一門の流れでは、澤田、井面、蘆田がこれに属し、二門は中川、世木、藤波、佐八の家々がこれに属している。

田丸城と村山龍平記念館

延元元年（1336）後醍醐天皇を吉野に迎えようと伊勢に下った北畠親房・頭信父子が玉丸山に城砦を築いたのが始まりである。その後、北畠の養子となった織田信雄が修築するが、天正8年焼失、稲葉道通が大修築し、元和元年（1615）の大坂の役以後は藤堂高虎の領有となった。

天主台、本丸、二の丸、北の丸、大手門などの石垣が残っている。

城跡内に村山龍平記念館がある。村山龍平は旧田丸藩に仕えた士族である。明治、大正、昭和の激動期を生き抜き、たくましい開拓者精神と卓越した指導力で朝日新聞を創始した。記念館には、村山龍平関係のもののほか、玉城町の歴史を知る貴重な品々が陳列されている。

棒原神社（皇大神宮摂社）

祭神 天須婆留女命御玉

JR参宮線外城田駅近くに丸い丘陵がある。この丘陵は、杉の森といわれ、古墳地帯である。古代、この地方を荒木田氏の祖先が開拓したので、その墳墓を作り伝えたものである。

延喜大神宮式には棒原社、神名式にも同じく棒原社とある。社名の棒原は、この丘陵地帯の杉原におられた神の社であることを示している。

祭神は天須婆留女命御玉（アメノスバルメノミコトノミタマ）で、一説にスバルとは昴星のことという。この星は、我が国農村において古くから信仰されていた。この星の出具合をみて播種するのである。

この御祭神によって、星の出具合で農耕を占った信仰がこの地方にもあったことがうかがえる。

儀式帳には社殿は二宇で、一つは天須婆留女命御玉、もう一つは御前神を祭っていたが、寛文三年の再興後、一殿となって今日に至っている。

この神社は奈良時代の鎮祭で、摂末社では新しいものである。儀式帳は摂末社の鎮祭を

1 倭姫命の御鎮祭御鎮祭

2 雄略天皇の時代の御鎮祭

3 奈良時代の御鎮祭

の3つとしているが、これは、その地方の開拓と、神社の鎮祭の順序をしめすものである。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

坂手国生神社（皇大神宮摂社）

祭神 高水上神

皇大神宮儀式帳には坂手神社、延喜大神宮式及び神名式には坂手国生神社とみえている。

坂手とは上田辺の山中で丘陵をなす地の坂のあたりにあることからその名としたものである。

鎮座の由緒としては大神宮本紀に、垂仁天皇の御世、倭姫命が皇大神を奉載してこの地に遷幸されたとき、国つ神の高水上神（高水神）がお迎え申し上げた。そのときこの国の名は岳高田深坂手国といい、田上御田を奉られた功績に対して倭姫命は、そこに、坂手の社を定められたと伝えている。

儀式帳には大水上神の子、高水上神を祭るとしている。中世以降社殿退廃したが、寛文3年再興し今日に至っている。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

寛文の再興のとき、旧社地から祭祀土器多数を発掘したと伝えられている。高水上神は田辺神田の灌漑用の水上の神であり、坂手の地方の水上を守り給う神である。

蚊野神社（皇大神宮摂社）

祭神 大神御蔭川神

蚊野御前神社（皇大神宮摂社）

社名は、儀式帳及び延喜大神宮式には蚊野社、同神名式には蚊野神社となっている。雄略天皇の御世の鎮座である。そのときには正殿一宇のほか前殿一宇があり、御前神を併せ祭られていたという。中世殿舎退廃したが寛文3年再興、御前神は御同座している。

祭神に特に大神が付いているのは、この地が荒木田氏により開拓され、大神宮領となった後は、天照大御神の御蔭をこうむるに至ったことを物語っている。儀式帳によると、造宮使造替六社のひとつとして摂末社の中でも特に崇敬を受けた神社である。

蚊野の名は火野から生まれた。（地名語源辞典）火野とは山林を焼き払って種をまく焼畑農業が行なわれた土地のことである。

この神は蚊野の開拓守護神で、蚊野の田野をうるおす外城田川支流の灌漑用水の大神を祭っている。

昔、外城田がこの付近を流れていたことは、神名帳考証に、「蚊野神社の祭神は速川の瀬に坐す瀬織津姫命」とあるところから察せられる。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門板扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

田乃家神社（皇大神宮摂社）

祭神 大神御滄川神

田乃家御前神社（皇大神宮摂社）

儀式帳には来田郷矢野村にありと記され、旧度会郡東外城田大字矢野に鎮座

社名は延喜式神名帳に田乃家神社、大神宮式齋宮式には田乃家社、延暦儀式帳には田邊神社とある。田乃家というのは、田の戸、すなわち御田を耕作する民戸のことで、その田の人家を守る神社である。

社殿は正殿一区、前殿一字とあるのもとは2社たてられていたことがわかる。

この神は、天照大御神の御神徳がこの地方に及び、この地方一帯から崇敬されたため、その祭神名の上に大神の2字を冠したものである。もとはこの矢野の田野を貫流灌漑する外城田川の支流の守護神をお祭りしたものである。

雄略天皇の御世の鎮座という。伝説ではあるが、他の摂末社が倭姫命の時代であることに比べると、荒木田氏がこの地を開墾したとき、その産土神として祭ったことがわかる。

天照大御神の御神徳をいただいて祭った神社であるため、造宮使造替六社のひとつとして高い格式が与えられていた。ここも中世社殿退廃したが寛文3年、本社一字のみ再興された。境内入り口に紀州藩の建てた、禁殺生石（享保甲辰建）がある。また天保13年銘の水盤もある。また古墳4基がある。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門板扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

朽羅神社（皇大神宮摂社）

祭神

千依比売命

千依比古命

多気町と境を接する、東原の田の中に大きな森がある。

皇大神宮儀式帳には、久麻良比（クマラヒ）神社とあり、延喜大神宮式には朽羅社、同神名式には朽羅神社と見えている。儀式帳には、倭姫命の祝い定め給う所なるよし、記されている。

社頭には天保3年の常夜灯が立っている。

社名の「クマラヒ」は、「クチラ」の転訛であり、意味はともに籠（コムル）であるといわれる。

コムルとは、神のコムル所の意で、この森は昔から非常に神聖視された森であったことがうかがわれる。

一名、宮田の森ともいわれ、古来、雨乞が行なわれた神社である。ひでりが続くと村人たちはこの森に集まり、鉦と太鼓とほら貝にあわせて「アーメ、ターモレ（雨賜れ）ターベヨー」とくり返し、くり返し雨乞の歌を歌った。すると一両日中に雨が降ったという。

祭神は、儀式帳には大歳神の子千依比売命一柱となっているが、現在、千依比売命と千依比古命の2柱をお祭りしている。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

御船神社（皇大神宮摂社）

祭神

大神御蔭川神

社名は、延喜大神宮式には御船社、延喜神名式には大神乃御船神社とみえている。

社頭には天保14年の常夜灯や、文政6年に土羽村中から寄進した石階等がある。

土羽はもと度会郡田辺郷に属していたが、大正5年、郡界の異動で度会郡から分離して多気郡に入り、多気郡西外城田村大字土羽となった。

社地は外城田川の上流地方で、外城田川が神社の東のあたりを流れている。この神社の由緒は、垂仁天皇の頃、倭姫命が坂手の国から外城田川を遡ってこられたとき、このあたりで水が尽き、その水が大変冷たかったので、この川を寒川と名付けられ、そこに船を留め、御船神社を祝い定められたという。（倭姫命世記）

土羽は鳥羽と同じく、泊（トバリ）で、船の留まるところであったと思われる。

倭姫命が名付けられたという寒川のご事により、田丸町は明治4年、寒川村と改名を命じられたが、明治7年田丸町に復している。

神宮要綱によれば、「倭姫命、皇大神を奉じ御宮地を定め給ひしとき、伊蘇宮より寒川を上り、この地に至り御船を留めて御船社を定め給へること、大神宮本記に見ゆ。是れ本社のご起源なり。」とある。

殿舎

| | | |
|------|---------|----|
| 正殿 | 神明造板葺南面 | 壹宇 |
| 玉垣御門 | 猿頭門扉付 | 壹間 |
| 玉垣 | 連子板打 | 壹重 |
| 鳥居 | 神明造 | 壹基 |

儀式帳には、御正殿二字とみえている。一字は大神御蔭川神を祭り、もう一字は御前神を祭っていたが、中世争乱のとき退廃、寛文3年の再興の時は一字のみ再興。

牟彌野神社（皇大神宮末社）

祭神 寒川比古命
寒川比女命

垂仁天皇のとき倭姫命により祭られた。儀式帳には未官帳の田社としてあげられている。

もとは、御船神社の付近に祭られていたが、中世社地を失い、永らくそ

の祀典が途絶えていたのを、明治4年再興、御船神社の社殿の内に同座、今日に至る。

祭神2柱は大水上神の子、今の外城田川（寒川）の守り神でこのあたりの田野の灌漑の神として御神徳をあつめていたものである。

この近くの笠木という集落（御船神社の西南で、朽羅神社へ行く道の途中）の地名は、「倭姫命世記」によると、御船神社で船を降りた倭姫命が陸路この地を通られたとき、にわか雨に遭われたので、御笠をつけられたことからカサギという名をつけられたという。

寒川の里に祭られている神々は、大水上神と天須婆留女命と大歳神の3系統の神々と、鏡を神体に祭る神社の2社がある。いずれも神格は水神で農神である。

※（参考）

「玉城町史」「ふるさとの散歩道」「伊勢志摩を歩く」「神宮摂末社巡拝」ほか

荒木田氏系図

(神境経談)

天御中主尊 · · 天兒屋根命 · · 国摩大鹿島命 — 大狭山命 — 天見通命 —

天布多由岐命 — 大貫連伊巳呂比命 — 大字祢奈 — 大阿礼命 —

大貫連波巳利命 — 神主最上 — 神主佐波 — 神主葛木 — 神主巳波賀祢 —

神主牟賀手 — 神主酒日 — 神主押刀 — 赤冠荒木田神主葉 —

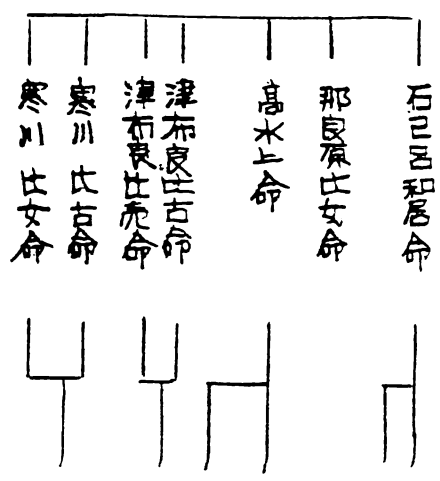
赤冠荒木田神主刀良 — 赤冠荒木田神主黒人 — 進木肆神主首麻呂 —

神主石敷 — 佐祢麻呂 (一門始祖) — 湯田郷城田御開拓

田長 (二門始祖) — 田辺郷開拓

河川の甲の神々
 (神格の水・木・鳥・魚)
 内宮神社
 ○中土神社
 (御神体)
 八幡宮
 八幡宮
 八幡宮

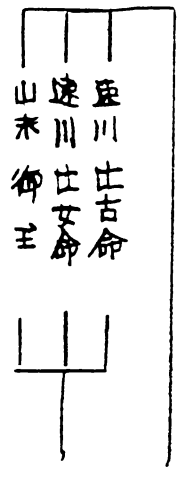
① 大水上神



石川和命 ○
 那良原比女命 ○
 高水上命 ○
 坂手國生神社 ○
 橘原神社 ○
 小杜神社 ○
 津和良神社 ○
 (石) (石) (石) (石) (石) (石) (石) (石)

② 天須理留女命

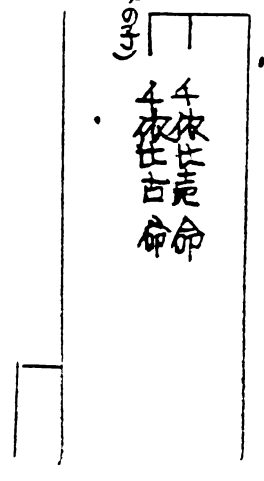
天須理留の御神体
 三十二神の一神



臣川止古命 ○
 遠川止女命 ○
 山木御王 ○
 狹田國主神社 ○
 (無) (無) (無) (無)

③ 大歳御祖命

(出雲系)
 (須佐之男命)
 (大山津見神の御神体)



千夜比古命 ○
 千夜比売命 ○
 朽羅神社 ○
 御船神社 ○
 (石) (石) (石) (石)

大神御陰川神
 (海鏡津姫命)

敗野
 土羽